

山田聖剛 論文内容の要旨

主 論 文

Characteristics of Inattention and Hyperactivity, Perception of General Health, and Reading Literacy of Japanese Adolescents: Results from a Large-scale Community Sample

中学生における不注意・多動性の傾向、精神的健康度と読字困難との関連：
長崎県における大規模調査の結果から

山田聖剛、今村明、本田純久、岩永竜一郎、澁谷顕一、Winnie Dunn、小澤寛樹

ACTA MEDICA NAGASAKIENSIA 61: 71－79, 2017

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻
主任指導教員：小澤寛樹教授

緒 言

2012 年に文部科学省が実施した全国調査によると、小中学生の 2.4%が読字と書字または読字か書字のいずれかで極端な困難さを経験しているとされる。読字困難は、海外ではディスレキシア(Dyslexia)と診断され、注意欠如多動症 Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder (ADHD)との関連や支援体制に関する研究が進んでいる。しかし日本では、母語である国語や外国語である英語の読字困難に関する研究は少なく、ディスレキシアの定義や用語も統一されていない。本研究は、中学生における国語と英語の読字困難の状況を調べ、ADHD の特性である不注意・多動性との関連を学年レベルと性差の視点を含めて明らかにすることを目的とした。

対象と方法

長崎市内の 7 つの中学校に通う生徒を対象に自記式質問紙調査を行った。国語の読字困難は、ひらがなの読み、漢字の読み、和文読解の 3 分野について、

英語の読字困難は、英単語の読み、英単語の発音、英文読解の3分野について、それぞれ「とても苦手」から「とても得意」の5段階で評価した。不注意と多動性の傾向については、Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ)を用いて評価し、精神的健康度の評価には General Health Questionnaire (GHQ)-12を用いた。解析対象者数は、2,987人（男子1,464人、女子1,523人）であった。

統計解析

ロジスティック回帰分析を用いて、国語と英語の読字力に関する苦手意識と関連する要因を分析した。従属変数は「とても苦手」の有無で、独立変数は、SDQにおける不注意と多動性の傾向のスコア、GHQ-12のスコア、学年レベル、および性別である。p値が0.05未満を統計的に有意とした。解析にはSPSS Statistics Version 23.0を使った。

結果

国語の3分野のいずれかを「とても苦手」と感じていた男子の割合は13.7%であったのに対し、女子では8.9%であった。英語の3分野のいずれかを「とても苦手」と感じていた男子の割合は24.6%であったのに対し、女子では22.1%であった。いずれの言語についても、読字困難を感じている生徒の割合は女子よりも男子が有意に高かった。

読字困難と関連のある要因について多重ロジスティックモデルによる解析を行ったところ、いずれの言語についても、不注意の傾向のある生徒、多動性の傾向のある生徒、精神的健康度の低い生徒で、読字困難を感じている割合が高かった。国語では、女子よりも男子に読字困難を感じている割合が高かったが、学年による差はみられなかった。それに対して英語では、学年が上がるにつれ読字困難を感じる割合が高くなったが性別による差はみられなかった。

考察

国語と英語の読字困難と不注意・多動性の傾向との間に有意な関連が見られたことから、日本においてもディスレキシアと注意欠如多動症が併存している可能性が高いと考えられる。英語の読みをととても苦手と感じている中学生は20%以上と高く、また学年が上がるにつれてとても苦手と感じている生徒の割合は高くなることから、言語学習の臨界期に対応し、母語である国語と外国語である英語の音韻構造の違いに配慮した英語の教授法の重要性が示唆された。